

## 2019 年度卒業生への学長メッセージ

新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るう中、3月25日に予定していた2019年度埼玉大学卒業式は中止せざるを得ませんでした。みなさんにとって人生の節目となるかけがえのない行事であり、規模の縮小や来場制限など、可能な限りの感染拡大防止策を講じた上で挙行することを検討していましたが、埼玉県内の状況が悪化したことにもとまらぬ、苦渋の決断をしました。卒業生が少しでも安心して新しい門出を迎えられるように、また国内外での感染をこれ以上上げないようにするための対応であることを、何とぞご理解ください。

このような状況の下、埼玉大学キャンパスは今日もその美しさを変わずに誇っています。そして、例年になく開花の早かった桜がうららかな春の日差しと調和し、みなさんの門出を祝福しているかのようです。この希望に満ち溢れた良き日に、埼玉大学を卒業する1,532名のみなさん、卒業おめでとうございます。学長として、心からお祝い申し上げます。また、みなさんを支えてこられたご家族の方々にも、深く敬意と祝意を表します。

1949年11月3日、埼玉大学は開学式を行っています。旧制浦和高校を母体とする文理学部と埼玉師範学校および埼玉青年師範学校を母体とする教育学部の2学部・2キャンパス、入学定員1,200人でのスタートでした。爾来70年の歴史を辿り、いくつもの節点や分岐点が繋がった埼玉大学の時間軸は、紆余曲折に今に至ります。現在は、教養、経済、教育、理、工の5学部と、それにつながる人文社会科学、教育学、理工学の大学院3研究科から成り、入学定員は2,157人にまで増えました。そして、これまでの埼玉大学卒業生は、みなさんや私を含め、88,847人に及びます。その中には、みなさんが在学中に顕著な活躍が認められて埼玉大学フェローの称号を受けた、2015年ノーベル物理学賞受賞の梶田隆章さん、2016年文化功労者で妖怪文化研究者の小松和彦さん、2017年日本芸術院会員で画家の根岸右司さんをはじめ、学術、文化、芸術分野のみならず、それぞれの場で多様に活躍する多彩な同窓生が数多く続いています。みなさんもその一員、活躍を期待せずにはられません。

埼玉大学の時間軸原点を振り返って見ることにします。『埼玉大学五十年史』によれば、1949年、新制国立大学として創立した埼玉大学の目的と使命は「広い教養と深い専門学術を備え、知的、道徳的、応用的能力を有する人材を養成する」ことでした。そして、「学問の理想の上で明徹なる普遍性を有し、学園の個性的情趣において郷土色豊かな大学の道、これを進む」とされています。また、新関良三初代学長は、「謙虚であって気品高く、卑怯と虚偽を排し、たくましく進むであろう諸君の姿を望見することは、我々の、何よりも大きな歓喜である」と、新入生を激励したとされます。これらの、言わば建学の精神、校風、学生気質は、70年経った今も脈脈と引き継がれているように思います。

まず、学問的普遍性を有し郷土色豊かな大学、という「建学の精神」です。これは現在の大学ビジョンである「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」につながります。文系、理系、教育系の多様な学問が集約され、日本人、外国人、社会人の多様な学生と教職員が1つのキャンパスに集う埼玉大学。知の府としての基盤強化と、首都圏埼玉という地域に根ざした個性化を進めています。卒業を機に、みなさんも埼玉大学での多様性豊かな4年間を、このような観点から振り返ってみてはいかがでしょうか。

次に、謙虚で気品高く、卑怯と虚偽を排してたくましく進むという校風、学生気質です。都会の喧噪から離れたキャンパスで真摯に学修にいそしみ、学生生活を大いに楽しむ埼玉大生

と接するにつけ、また、地道にコツコツ研究を進めてノーベル賞を受賞、埼玉大学での記念講演でお人柄がにじみ出た梶田隆章さんのような同窓生の活躍を目にするにつけ、謙虚さ、気品、誠実さが DNA として受け継がれていることを学長として強く実感します。みなさんには卒業後も、この埼玉大学の「校風」を変わることなくつないでいてほしいと思います。

埼玉大学の長い歴史にあって、卒業式が中止されたことは過去にも一度あります。2011年、3.11 東日本大震災の影響を考慮してのことです。東日本大震災のもたらした教訓は多岐に亘りますが、その一つに「レジリエントな社会づくり」の考え方があります。resilience とは精神的回復力などと訳される心理学用語であり、脆弱性の反対の概念です。辞典には「the ability of people or things to feel better quickly after something unpleasant, such as shock, injury, etc.」とあります。これを受け、「レジリエントな社会づくり」は柔軟性があり、自然災害や重大事故に強く、回復力のあるコミュニティを作っていくことを意味します。「想定外」という言葉を安易に使うべきではないものの、将来のことに関しては何らかの「想定」をせざるを得ず、将来を確実に予測できないという意味で、「想定外」のことが起こることは「想定内」のことと言えます。したがって、防災という自然科学的なハード的対策による災害への備えだけでは、想定外のことが起きた場合に無力であり、これに加えて災害時の対応と災害後の復旧という人文社会科学的なソフト的対策を想定するのが、レジリエントな社会という新たな考え方です。歴史を振り返れば、人間は常に悲惨な災害や事故を教訓の前に進んで来ました。このレジリエンスという新たな考え方も、自然災害や重大事故をもたらした人間社会の未熟さを真摯に受け止め、硬直化しがちな人間の考え方をいかに柔軟にできるかということの重要性を教えてくれています。

この10年で2度の卒業式の中止を経験し、また、私たちもその怖さを実感した昨年の豪雨災害等、自然災害の激化を目の当たりにした今、人間社会の脆弱さが進んでいること、人間社会でのリスクが多様化していることを実感せざるを得ません。「リスク社会」について千葉大学の神里達博教授が興味深い小論を発表しています（「學鑑」、Vol.115, No.2、丸善出版、2018年）。彼は「いつの間にか私たちの生活は、さまざまな不安に苛まれるようになった。むろんいつの時代も、人々が生きていく上で不安はあったに違いない。しかし、生活の中で不安がこれほどまでに前景化している現状は普通のこととは言えまい。いったいなぜこんなことになったのだろう。」という問いかけから始め、ドイツの社会学者 Ulrich Beck の考えを引用して次のように説明しています。つまり、近代化が進展していくことで、大きく二つの変化が生じていきます。一つは、豊かさを目指していたはずの近代化が、環境問題の発生等、むしろ私たちの「生」を脅かすようになっていくという変化、もう一つは人々の側の変化、つまり物質的な豊かさがある程度以上達成されると、新たなモノを得るよりも、それを失うことを人々は恐れるようになる変化です。この二つの変化が同時に進行することで、リスクが社会的課題の最上位に据えられるようになるという説明です。また、彼は、同じドイツの社会学者 Niklas Luhmann の「リスク観」についても取り上げ、次のように論じています。「リスクは、自由のもとで決定が為される時には常に顔を出す。さらにいえば、責任も一緒についてくる。皮肉なことに、決定の可能性が広がれば広がるほどこの世界はリスクに満ちてくる。科学技術が発展して外界の操作可能性が高まれば高まるほど、また民主主義が拡大して政治への市民の参加の経路が広がれば広がるほど、自由や責任と一緒にリスクが私たちのところに降りてくる。」

では、私たちはこれらのリスクにどう向き合えばいいのでしょうか。新型コロナウイルスがもたらしているリスクを目の前にして、なかなか難しい問いです。ただ、科学者のあり方を語り、原発事故についても触れた、哲学者 鷺田清一先生と霊長類学者 山極寿一先生の対談（「都市と野生の思考」、インターナショナル新書 013、集英社、2017年）が一つのヒントを与えてくれているように思います。まず、臨床哲学を提唱する鷺田先生は、残っている食材で何をつくるか考え、食事の用意をしながら洗い物をしたり、子供の面倒もみたりといった家事の感覚が臨床哲学の一つの例とした上で次のように述べています。「まわりに目配り、気配りしながら、あり合わせのものをうまく使って、全体や他者への心遣いをする。そういう知が今求められている。学問が細分化されたため、知をすべて司るような人がいなくなり、このことが福島原発事故を大きくしたのではないか。」これに対し、山極先生は「最近は自分の好きなものを好きなときに好きな場所で食べ、食事だからといってあえて集まる必要もない。科学者が、自分の好きな領域にとどまって、外の世界に目を向けないのと同じ構図だ。」として、科学者は専門性を究めようと自分のテーマをどんどん掘り下げ、その間は他のことに目を向ける余裕などないことを指摘します。そして、次の鷺田先生の言葉につながります。「今、求められるのは上下方向ではなく、水平方向に気を配る知。例えば、原子力の問題を家事的発想に基づき考えるなら、予算はもとより、現状と将来のリスクから後始末まで見通す必要がある。これらを全方位的に水平方向に気配りできるのが、科学者の教養である。」

人間社会が前に進むためにはリスクとうまく向き合うことが大切であることと同じく、一人ひとりの成長も、失敗とのつきあい方で大きく違うと言えそうです。「失敗は成功の母」を科学的に実証したとして未だに多くの人に読まれている「失敗学のすすめ」（講談社文庫、2005年）の著者、東京大学名誉教授の畑村洋太郎博士は、人は失敗から学び、さらに考えを深めていくとしています。そして、失敗学の根本にある考え方を次のように説明します。「人間がなにか新しいことをしようとして行動すれば、その結果はまずまちががなく失敗に終わる。しかし、その失敗自体は悪いことではなく、その経験の中で自分が見たこと、感じたこと、考えたことは必ず次に役立つ。このとき一番まずいのは、失敗に懲りて挑戦自体をやめてしまうことである。そうすることでたしかにその人は失敗することもなくなるが、同時に自らが進歩するチャンス、成長するチャンスも失ってしまうことになる。そのことをぜひ覚えておいてもらいたい。」と。何かしらの目的意識を持った人が、実際の体験の中で、自分自身で何かを感じたり、自分の頭で主体的に考えたりすることこそが大事で、そのように行動している人だけがどんな状況にも柔軟に対応できる本当の知力、本当の知識を体得できます。

昨年、ノーベル化学賞を受賞された吉野彰博士も失敗の重要性に言及しています。受賞時の笑顔からうかがえる実直な研究姿勢と温かなお人柄の吉野博士は、「失敗しないと、絶対に成功はない」と言います。リチウムイオン電池の開発の成功の前に3度、プロジェクトが実らなかった経験をしているとのことで、彼の言葉には重みがあります。そして、吉野博士は自分自身について「剛と柔」の性質があると分析されているそうです。「剛」は研究に対する執着心、「柔」は物事を楽観的にとらえる気持ちの余裕であって、研究では両方が必要、ただし、そのバランスが難しいとのこと。つまり、失敗を恐れていては研究を前に進めることができませんし、失敗しても楽観的であることが大事です。ただ、楽観的すぎてはさらに前に進むことはできません。成功に結びつけるためには、なぜ失敗したかを明らかにし、何が何でも成功させるという執着心が必要です。みなさんも、卒業研究などで同じ経験をしているのではないのでしょうか。失敗することの大切さを再度、認識してほしいと思います。

「科学者の教養」として、鉛直方向にだけでなく水平全方位に気配りすることや、失敗を恐れずに失敗から学び成長することが重要であることは理解できたとしても、それらを実行するのは簡単ではありません。また、歴史学者で「21 Lessons」（河出書房新社、2019年）等の著者である Yuval Noah Harari 氏は、これからも AI は進化を続け、人々は何度も自己改革を迫られるだろうと指摘します。「進化論」の Charles Darwin の言葉を借りれば、唯一生き残ることが出来るのは「変化できる者」です。これからの時代に適応して人間が成長し、社会が進化するためには、自己改革、つまり私たち自身が「変わる」必要がありそうです。

では、具体的にどうしたらいいのでしょうか。「変わる」ことについて、ひきこもりの臨床に長らく関わってきた精神科医の斎藤環・筑波大学教授は「対話」の重要性を述べています（「対話で人は『変わる』のか」、學燈、Vol.116, No.3, 丸善出版、2019年）。彼によれば、人が人を変える手法は様々だが、王道は対話によって変化を起こすことだそうです。ただし、対話においてなされるのは、主観と主観の交換であって、主観を適切に矯正することではありません。対話によって起きる変化は、当事者の主体性と自発性を徹底して尊重し、本来持っている強みを活かす結果につながるということです。

対話の重要性については、東京大学の梶谷真司教授も著書「考えるとはどういうことか：0歳から100歳までの哲学入門」（幻冬舎新書、2018年）の中で言及しています。哲学とは問い、考え、語ることだそうです。私たちは、問うことではじめて考えることを開始します。しかし、頭の中で考えていても、ぼんやりと浮かんでは消えるだけなので、語ることが必要になるとのこと。きちんとした言葉で語ることで考えていることが明確になります。しかも、他の人に語りかけ応答してもらえれば、思考はより深く豊かになります。したがって、他者との対話が意味を持ちます。「対話では、さまざまな人がそれぞれに異なる立場、視点から物事を眺め、語るがゆえに、おのずともの見方や考え方が広がり、深まっていく。そこで、それまで自分を縛っていたものに気づき、そうではない可能性を考えられるようになる。」と梶谷教授は言います。対話によって、水平方向のさまざまな方位へ知を展開できそうですし、失敗から学ぶことができそうですし、そして「変わる」につながりそうです。

これからの社会は変化が急激で、将来の予測が難しい不確実なリスク社会です。人間社会の幸せのためには多様な人びとの、鉛直にも水平にも広がったさまざまな知を結集しなくてはなりません。この知識集約型社会において、皆さん一人ひとりがその一員としての役割を期待されています。大学を卒業するという事は一つの節目でしかなく、勉強はいつまでも続きます。みなさんには主体的、自発的な「問い」のもと、思考と対話を繰り返して「変わる」ことを柔軟に捉えていってほしいと思います。考え、対話するためには、問い続けること、そして好奇心が意味を持ちます。Albert Einstein の名言のとおり、「The important thing is not to stop questioning; curiosity has its own reason for existing. Never lose a holy curiosity.」

最後に、みなさんが変わらずに「謙虚であって気品高く、卑怯と虚偽を排し、たくましく進むこと」を心から祈念して、卒業生への学長からのメッセージとします。

令和2年3月25日

埼玉大学長 山口宏樹